



「介護保険被保険者証が届いた」

6月早々、保険者から「介護保険被保険者証」の入った封書が届いた。昨年度まで国民健康保険料と一緒に徴収されていた介護保険料が、65歳になり介護保険の第1

した頃合いを見計っていたかのよう

に送られてきた。開封すると、冊子とともに「住み慣れた地域の中でのつながりは、いつまでも自分らしい豊かな生活の大きな力になります。学びたい、趣味を楽しみたい、ボラ

役立ててください」とのメッセージが添えられていた。

A4判の冊子は、①ボランティア活動をしてみたい、②仕事をしたい、働きたい、③学びたい、④趣味を楽しみたい、⑤いつまでも元気でいたい、⑥地域で活動したい、の6項目立て30ページ。

その裏面には、「ミドル・シニアのための生きがい探しフリーマガジンはいかがだったでしょうか?何か始めたいけど何をどうしたらいいか分からない、新しい活動(ステージ)を始めよう!と思いたった時にぜひこの冊子を手

に取ってみてください。これからの長い人生、地域でどう過ごしていくかを一緒に考えてみませんか?」。

保険者からの心憎い言葉に見入って、幾度となく読み返した。

「60代の若者たちへ」

新年早々の1月20日付の読売新聞のある紙面に目が釘付けとなったことを思い出した。

「60代の若者たちへ。人生の節目を迎え、新たな生き方を模索する方々へ。82歳の今もなお、自らの活力あふれる日々を創出されてい

る脚本家・倉本聰さんから、成熟した大人世代に贈るメッセージです」と、大手飲料メーカーが呼びかけた広告ページである。

「この先をどう生きるか。しまっておいた夢を取り出してみないか」長く生きることより、どう生きるかに価値がある」「もう一度スタートした原点や初心に立ち返ってみる」など、これから高齢者となる人に向かって鼓舞激励する言葉が躍っていた。

社会が抱く「高齢者は○▲×だ!」という先入観を払拭するのは、高齢者自らであろう。

「先入観は可能を不可能にする」という言葉がある。

誰もが生き生きと、しかも活き活きと生きることを可能にする粹な仕組み(計らい)が必要だ。

年齢を重ねても自らのことを好きでいられる粹な「好齢者」となっていて、その生きざまを示すことは決して不可能なことではない。介護

事業者は、「働き方改革」とともに「生きざま改革」を地域社会に示すことこそが、2040年に向かつて進む業界戦略ではないか。

「介護保険被保険者証」は、受け取る当事者の心ひとつ。

転期に立つ経営の視座②

「先入観は可能を不可能にする」

号被保険者になったことから、その計算や徴収方法にも変更と手続きが生じることとなった。

「介護保険被保険者証」を手にしたことから、高齢者という言葉が他人事ではなく我が事であるとの意識に目覚めて3週間が経過。別の部署から新たな郵便物が、そう

はやかわ・ひろし

経営コンサルタント。「継承と人材創造塾」主宰。「介護ビジョン」編集委員、介護福祉教育マスター、健康経営アドバイザー。著書に「99の言葉の杖」(日本医療企画)、「早川浩士の常在学場」(筒井書房)、「介護人材創造塾」(筒井書房)、「介護保険改正に勝つ!経営」(年友企画)、「データで徹底分析介護事業の最新動向と経営展望」(日本医療企画)など。

HP: <http://www.hayakawa-planning.com>

ンティアをはじめたい」などの思いを、地域の中でも実現していただけよう、そのきっかけとなる情報を集めた「セカンドステージ・サポート・ナビ」を発行し、節目の年を迎える皆さまにお送りしております。新たなつながりや生きがいを発見する機会としてお